〔東京家政大学研究紀要　第27集，p. 23〜32, 1987〕

ルソーと汎愛教育派について
—その身体教育論を中心にして—

坂　入　　明

（昭和61年9月30日受理）

On Rousseau and Plilantropen
—Focusing on Theory of Physical Education—

Akira SAKAIRI

(Received September 30, 1986)

はじめに

今日われわれは，身体運動やスポーツが児童生徒の人間形成にとって，必要不可欠の一領域であると極めて一般的に理解している．しかし，このような認識に到達するまでには紆余曲折のさまざまな検討努力の歴史的積み重ねが必要であった．とりわけ，ヨーロッパにおいて18世紀後半から公教育形態としての学校教育の歴史的発展の過程で，学校のカリキュラムの中に新しく体育教育が導入され，次第に多くの実践がなされていく歴史をわれわれは知っている[1]．このような視点から近代体育教育の史的流れを見るならば，18世紀後半のドイツにおける汎愛学校（Philanthropinum）での体育教育の実践をもって近代体育の始源とする見解がある．特に，近代体育教育の起点は「近代体育の父」といわれるグーツムーツ（Johann Christoph Friedrich GutsMuths, 1759—1839）によるシュネッペンタールの汎愛学校における8年間の体育教育の実践や研究の成果を集大成し，1793年に出版された「青少年の体育」（Gymnastik fur die Jugend）にあるとする一般的評価が体育界に存在している[2]．

ところで，「青少年の体育」は同時代の医師フランク（Johan Peter Frank, 1745—1821）やチッソ（Simon Andreas Tissot, 1728—1797），ロック（John Locke, 1632—1704）等多くの医者や教育者等から学びながら，医学（生理学），教育学的見地から体育教育について叙述されたものである．その中でグーツムーツは体育教育の必要性や教育性等を強く訴えながら，身体運動による教育としての体育理論の確立と国民教育への体育教育の導入について，理論的側面と実践的側面から体系的，組織的に論述している．とりわけ，ルソー（Jean Jacques Rousseau, 1712—1778）の「エミール」（Émile ou de l'éducation, 1762）から多くの影響を受けて書かれたものであることは，その引用文の多さからいっても理解されるところである．この点については従来教育史や体育史研究の中で，ルソーと汎愛教育思想家のバゼドウ（Johann Bernhard Bassedow, 1724—1790）やザルツマン（Christian Gotthilf Salzmann, 1744—1811）等との関連として，通史的な若干の研究はなされている[3]．特に体育史的な観点からルソーと「最後の汎愛教育者[4]」といわれるグーツムーツの関連を扱ったものは現在日本においては皆無であるといってよい．

そこで本小論は，ルソーとグーツムーツの有する体育思想の関連性を両者の主著である「エミール」と「青少年の体育」を中心に取り上げながら，特に「青少年の体育」の中にルソーや「エミール」が数多く引用されている箇所について焦点を当て，両者の教育・体育思想の関連性について比較考察を試みながら，ルソー体育思想の有する体育思想史的意義を究明してみようとするものである．

1　汎愛学校と身体教育

17世紀以来の自然科学や技術の発展とともに，人間の無限の可能性や人間の諸能力の開発による社会の改善や進歩が社会の平和や福祉に貢献するとの考え方が教育界に広まってきた．そして18世紀後半からは，合理的な教授理論や教授方法の体系化が叫ばれ，ギリシア語のPhilanthropia（人間愛）に由来する汎愛教育派（Philanthropen）がドイツを中心として次第に発生してきて

体育学第4研究室

いたのである．それは身分制社会からの人間の解放を願い，民衆にも平等な教育や学習の機会を拡大しようとする多彩な国民教育論の展開運動の一派となっていった．

この運動は,1774年バゼドウによってアンハルト候国デッソウに人類友情の学校として「汎愛学校」(Philanthropinum）が設立され，その新学校に起源を有するものであった．この学校の教壇に立ったカンペ（Johachim Heinrich Campe, 1746—1818),トラップ（Christian Trapp, 1745—1818),ザルツマン等によって世俗的，実利主義的，合理主義の立場から，教育内容や教育方法の合理化が主張され，その実践が行なわれることとなった．彼等の新しい教育的努力は王候・貴族に依存したいわば体制内改革であり，ペスタロッチーも批判したように，方法万能主義的な面は確かにあったが，汎愛教育派の人々の残こした教育理論や実践は教育学史上きわめて重要な役割を果たすことになったのである[5]．その特徴的な教育論は身体教育の重視，労働教育の尊重，遊戯的学習方法，直観・実物教育，公益と実利を重んじる教育，さらに教員養成の問題を論じた教育思想にあった[6]．このような斬新な教育思想は，領邦体制下に次第に資本主義化の途上にあるドイツ新興市民の教育要求を表明していたものといえるのである．

汎愛学校の始祖バゼドウの著作に啓発され，1781年春から約2年間デッソウの汎愛学校に迎えられ，宗教教授を中心に担当したのはザルツマンであった．彼は，1784年にゴータ候エルンスト2世等の資金的援助で，チューリンゲンの森の麓のゴータ近郊のシュネッペンタールの森の中に，多い時でも数十名の家族的雰囲気の汎愛学校を設立し，中産市民階層の教育要求に基づいて，行動的で道徳的な市民の形成をその新しい教育理念によって志向したのである．そして，ザルツマンは「蟹の小書——不合理な現代教育批判」(Krebsbüchlein oder Anweisung zu einer zwar nicht vernunftigen aber doch modischen Erziehung der Kinder, 1780),「コンラッド・キーファー——子どもの合理的な教育のために，民衆のための書」(Konrad Kiefer oder Anweisung zu einer vernünftigen Erziehung der Kinder, 1796）等の著作によって教育史上に与えた影響も大なるものがあった．このザルツマンのシュネッペンタールの汎愛学校の教師にグーツムーツが就任したのは，1785年7月3日であった．さてグーツムーツのここまでの経歴について簡単に述べておこう．

グーツムーツは1759年8月9日，ドイツのクエドリンブルグ（Quedlinburg）に生まれ，家業は代々鞣し革を業としていた．11才で古典語を中心とするギムナジウムに入学したが，14才で父を失ない，女子修導院長待医リッター（Dr. Ritter）家の上の二人の子どもの家庭教師を経験することになった．この家庭教師の経験はやがてグーツムーツの将来を決定することになるのである．その結果，彼は教育や人間の発育発達についての勉強を熱心に学ぶということになるのである．その後1779年，20才で当時「輝ける大学」といわれたハレ大学に入学し，神学を専攻したのである．しかし後に「自伝」にも述べているように宗教界の争いを好まぬグーツムーツは，教育職を自己の本性に適したものと考えるようになっていた．だから彼は学生時代に，はじめデッソウの汎愛学校の教師であり，後に1779年ハレ大学教育学教授になった，汎愛教育学者トラップの講義から教育学に関する学識を学び，自己の教育観の形成にとって大きな影響を受けたのである．

約束どおり彼は3年間の大学生活終了後再びリッター家の家庭教師を続けたが，リッター博士の死によって，グーツムーツの生涯を決定づける事態が起こったのである．諸事情のあった後，間もなくグーツムーツはリッター家の第一子ウィルヘルムと第三子カールを伴なって，ザルツマンのシュネッペンタールの汎愛学校を訪れることになったのである．そこでのグーツムーツと校長ザルツマンとの出会いは後に体育史上重要な意義を持つ事になったのである．すなわちグーツムーツとザルツマンは短時間の間に教育問題に関して意気投合し，グーツムーツは急遽予期に反して，シュネッペンタールの汎愛学校に教師として就任することになったのである．彼の担当科目は独語，仏語，地理，歴史であったが，新しい汎愛派教育に強い関心を有していたグーツムーツは，教育学に興味を引かれ，一方で多くの教育書を研究したことは，後に「自伝」に述べているとおりである[7]．

さて，シュネッペンタールの汎愛学校では，バゼドウ，ザルツマンの伝統に従って，身体に関する教育はその重要な柱の一つとなっていた．内容的にはジモン（Johann Friedrich Simon）やヅトア（Johann Jacob Du-Toit）以来行なわれて来た，従来の中世的騎士運動や民衆的運動をより教育的に計画化した身体訓練に改良したものである．すなわち，競走，跳躍，登攀，平均，運搬，遊戯等の運動種目がより教育的に方法化された形で

展開されていた．最初ザルツマンは汎愛学校の特色でもある，風光明媚なシュネッペンタールの樫の木の森のほとりの体育場にグーツムーツを案内したのであるが，そこで行なわれていた，深い配慮に基づいた身体教育は次のような点に特色を有するものであった．

そこでの身体教育は知的教育や道徳的教育の基礎であり，食物と休養と身体運動を中心とする身体養護（身体の教育）によって，健康の維持と増進，体力の強化，身体の十全な完成を求めるものとして考えられていた．具体的には，身体養護の内容として「①衣類，②食物，③身体運動よりなり，身体運動の項目には，走・跳・平均・遊戯・ダンス・乗馬・歌・楽器演奏・造園作業・製本作業・指物作業・レンズ磨き・散歩・旅行など[8]」を包摂する，広い意味での身体の教育といってよいものであった．

このような身体運動は設立と同時にザルツマン自身によって計画的に指導され，その授業の補助をしたのはボイトラー（Heinrich Beutler）であった．そしてこの二人による体育指導は，1785年にはアンドレ（Christian Karl Andre）に委任され，引き続き1786年までの約一年間アンドレによって担当されたのである．そしてシュネッペンタールの汎愛学校のおよその時間割は，午前7時から11時まで各種の授業，11時から12時までは体育（Gymnastik），12時昼食，昼食後2時までは休養，自由遊戯，身体運動，2時から5時まで各種授業，7時の夕食までおやつや自由時間となっていた[9]．

アンドレは11時頃になると生徒達を戸外の緑の運動場に引率して，溝跳びをしたり，高跳び，平均台運動，的投げ，縄跳び走，棒高跳び，散歩，登攀，重量運搬，水泳，遊戯運動，冬はスケート等を実施した．雨天の時は室内で正しい姿勢や簡単な体操などが指導されていた．そして他の教科目と同じように体育的に優れた生徒は，昼食時に樫の木の技で作られた冠で表彰される習慣があった．アンドレの体育指導は普通，運動能力等によって上級，下級のクラスに組織されて，自然で活気に満ちた喜びにあふれたものであり，生徒達も積極的に参加していたようである．また，アンドレ主任の他に何人かの教師が補助し，監督にあたっていたのである．やがてグーツムーツも協力教師としてそれに参加するようになったのである．

以上のことからグーツムーツ以前のシュネッペンタールの汎愛学校での体育は，毎日昼食前の11時から12時にかけてザルツマンやボイトラーやアンドレを中心として実施され，指導されていたことをわれわれは理解できたのである．そして理念的には，新しく抬頭しつつあった中産市民階層の教育要求に応えて，自分自身の力で生きていくことのできる独立的な自立人をその教育理想とするものであったと見ることができる．このようにわれわれは，その人間的基礎に身体運動による健康や身体形成が必要であるとの認識が市民の間で次第に高められてきたことを窺うことができるのである．またそこにはシュネッペンタールの汎愛学校における市民的教育理念に基づいた身体形成による全人陶冶という近代的体育の萌芽を認めることもできるのである．また内容的には，古い騎士運動や民衆運動の有する前近代的な属性を次第に克服して，近代的市民的な身体教育として教育的性格を有する体育教育であったことをわれわれは理解することができるのである．生徒の健康や全面的身体形成を目指すこのようなグーツムーツ以前の汎愛体育（Philanthropiche Gymnastik）の考え方には，運動による人間の形成という点に体育史上の意義を認めることができるのではあるが，国民教育への「体育」（Gymnastik）の導入についてや「体育」を教育や人間形成の一つの領域として位置づけたり，明確な体育教育の確立については，バゼドウやザルツマンの汎愛体育後のグーツムーツの近代的体育論を待たなければならないのである．

2　グーツムーツの体育論

グーツムーツは最も早く，最も体系的な近代体育の理論を作りあげた「近代体育の開拓者」といってよい．つまり，従来の汎愛体育に学びながら，生理学，解剖学，教育学等を援用して身体の形成や体育教育について組織だて，近代教育の中に相対的に独立した一領域として体育を位置づけ，その理論的確立を行なった人物であるといえるのである．このようなグーツムーツによる近代体育理論の確立こそ，やがてドイツのヤーン（Fredrich Ludwing Jahn, 1778—1852），スウェーデンのリング（Pehr Henrik Ling. 1776—1839），デンマークのナハテガル（Franz Nachtegall，1777—1847），スイスのクリアス（Phokion Heinrich Clias, 1782—1884），フランスのアモロス（Don Francisco Amoros et Ondeano, 1770—1848）等の国民教育への体育導入運動（国民体育論）への道を開く原動力になったのである．このことは「青少年の体育」がイギリスで1800年，フラ

ンスで1803年，アメリカで1804年，オランダで1806—13年，スウェーデンで1813年，イタリアで1827年，ギリシアで1837年に各国で翻訳されているところからも理解できるのである[10]．

グーツムーツは「世界ではじめての近代的体育指導書」といわれる「青少年の体育」の表題に付記して，ペーター・フランクの「あなた方は宗教や市民権については教えているが，彼らの健康や身体形成については何も教えていない[11]」という言葉を引用しながら，当時の学校教育の中で無視されていた身体教育について，彼の問題意識を簡潔に披瀝しているのである．これは他の先進諸国イギリスやフランスより遅れて資本主義化の道を歩み始めた，18世紀末の領邦絶対主義体制下のドイツが，さまざまな社会的矛盾をますます露呈してくることに関係していたのである．つまり，貴族や知識階層は華美で柔弱で，怠惰な生活と知識のつめ込みや役に立たない非実用的学問を教えることによって，虚弱で役に立たない無能な人間となっていく．一方産業革命の進行により，農民や労働階層も早朝から深夜までの資本主義的重労働のために，身体的に不具者になっていくといったような当時の情況が次第に深刻化されていく様子を指しているのである．特に，「青少年の体育」の随所にグーツムーツが述べているように，このような情況下で当時のドイツ人やその生活ぶりは，古代ゲルマン人と比較した場合は著しく身体的，体力的に衰退したものとなっていたのである．また精神的，人格的にはかつての英雄的な性格は消失し，人間的虚弱化が当時のドイツ人の一般的姿としてグーツムーツの目には映ったのである[12]．つまりこのようなドイツ国民諸階層に蔓延している，誤まった当時の生活法や身体を等閑視した教育が，「世代の虚弱化」とか「時代精神の虚弱化」を招いていたのである．このことについてグーツムーツはドイツ国民を憂いて，「このような虚弱化の情況の進行のもとで，文明化（洗練化）された人類の身体的衰退や，かつての極めて賢固な英雄的本性の退化について嘆き，ますます弱くみじめになりつつある世代について心配するのである[13]」と述べている．このような「時代精神の虚弱化」の改善のために，グーツムーツは合目的な身体運動と適切な体育的訓練によって身体を完成する術である「体育」（Gymnastik[14]）を教育計画の中に是非とも導入しなければならないと考えたのである．そしてそのことこそ急務なことであるとグーツムーツは声を大にして叫んだのである．またこのことはグーツムーツを，シュネッペンタールの汎愛学校で，体育教育の指導と研究に50年余りあのように没頭させる根本動機となったものである．

以上述べてきたような国民全体に及ぶ身体的，道徳的堕落をひきおこしている「時代の虚弱化」の最大の原因が，国民教育における対策のなさ，すなわち身体教育の欠如こそその原因であるとグーツムーツは考えていたのである．そこでグーツムーツは「今や国民各層は身体的虚弱化に対して，われわれの自然力が次第に減退してきたことにその原因を帰すべきではなく，われわれの不自然な教育法や生活法にのみ原因を求めるべきである[15]」と訴えかけたのである．ここにグーツムーツの新しい「体育」（Gymnastik）の主張や「青少年の体育」叙述の出発点をわれわれは見出すことができるのである．

ところでグーツムーツは青少年を心身ともに健康で，行動的，道徳的市民に形成するために身体教育の教材的領域として三種類の教育的身体運動があると主張している．つまり，それらを「身体形成を目的とする本来の体育運動」,「手工作業」,「集団的青少年遊戯」の三つに分類しているのである．そして彼はこれらの領域ごとに実践的研究を重ね，初期の三部作としては構成された体育運動として「青少年の体育」，厳粛な作業として「手工作業書」（Mechanische Nebenbeschäftigen für Junglinge und Männer, 1801），自由な遊戯として「遊戯書」（Spiele zur Uebung und Erholung des körpers und Geistes, 1796）の著作を残こしている．しかしなんといっても，グーツムーツが精魂傾むけたのは主著である「青少年の体育」であった．この「青少年の体育」によって従来の養生的で包括的な身体運動から教育的身体運動による教育としての「体育」が独立し，「体育」は教育活動の中に明確な一つの領域を占め，その位置を有することになり，「体育」（Gymnastik）が新しく成立することになるのである．

では具体的に「体育」による身体形成や人間教育の目標としてグーツムーツはどのようなことを思い描いていたのであろうか．「青少年の体育」の第５章「体育の効用と目的について」の中に彼は，ルソーの「エミール」から「体力と知力，賢者の理性と競技者の活力[16]」の調和的形成に関する言葉を引用しながら，心身の調和こそ人間の最も完全な理想的姿を示しているものであるとグーツムーツは述べている[17]．つまり身体の発育や健康とともに子どもの精神的，道徳的発達は達成されるべきであ

り，身体の形成をなおざりにした人格形成や精神形成では，不完全な人間の形成になることをグーツムーツは警告していたのである．そしてグーツムーツは「体育」の真の目的は精神と身体との調和であると述べ，体育の直接的作用としての身体形成と副次的作用としての精神形成について述べながら，人間の二側面である身体と精神の望ましい諸特性を対比的に次のように簡潔にまとめている．

Gesundheit des Leibes — Heiterkeit des Geistes
Abhärtung — männlicher Sinn
Stärke und Geschick — Gegenwart und Mut
Tätigkeit des Leibes — Tätigkeit des Geites
Gute Bildung — Schönheit des Seele
Schärfe der Sinne — Stärke der Denkkraft[18]
身体の健康 — 精神の明朗
鍛練 — 男性的精神
強さと器用さ — 大胆と勇気
身体の活動 — 精神の活動
良い身体形成 — 魂の美
感覚の鋭さ — 思考力の強さ

このようにグーツムーツが「体育 」に求めた人間像というものは，時代を超えたギリシア的人間像ともいえるものである．身体的，生物学的側面から眺めれば鍛練的体力，しなやかな技能，鋭敏な美であり，これを精神的，人格的な面からいえば勇気，沈着，克己的意志などのいわばゲルマン的気質を備えた人間であった．これは当時抬頭しつつあった，自立的市民階層の新しい理想像でもあった．このようにグーツムーツが新しい「体育」に求めたものは，近代市民社会への移行期に諸特性を備え，市民的立憲意識に基づく「繁栄社会」(Blühende Gesellschaft) を建設し，そこに生きる実務的能力を具備した，幸福に生きていくことのできる，いわば理想的人間像であったということができるのである．

3　ルソーとグーツムーツの関連性

このようにルソーの「エミール」から，心身の調和的教育について多く引用しながら[19]，人間の教育に際していわば人間の身体と精神の相補的形成論を強く主張するグーツムーツは，またルソーと同様に一種の「自然」(la natur, die Natur) への憧れを持っていたのである．だからグーツムーツは，都会を離れたチューリンゲンの森の麓の林や田園に囲まれたシュネッペンタールという自然の中で，汎愛学校の教師として50余年を送り，生涯をそこで過ごしたのである．グーツムーツが述べているようにシュネッペンタールの体育場は，「木立ちの周辺にあり，乾燥した牧草地や草地が細く入り込み，そして個々の樹木がそこここに木陰を与えている．あちこちに小さな砂の丘があり，高い山々はその付近を美しくしている．そしてそこには程よい小川が幾重にも曲がりくねっている．なお近くに川が流れている[20]」といったような，まさに緑豊かな風光明媚な「自然」の中に位置し，いろいろと教育的に工夫，考案された「体育」のための設備，器具が配置されていたのである．そこでの体育活動は自由で，自然で，喜びに満ちた各種の体育運動を行なうことによって，心身の調和的に発達した健康な人間の育成をめざすものであった．

このような教育的環境こそ，「都会は人類堕落の淵だ．……再生をもたらすのはいつも舎田だ[21]」と叫び，理想の子どもエミールを都会を離れ，自然のあふれた田園の中で育てようとしたルソーの自然主義教育の舞台となった所ではなかろうか．とりわけ「青少年の体育」は，ルソーの「エミール」から多くの影響を受けて，叙述されているのであるが，引用文の多さからもこのことは窺えるのである．このことはグーツムーツが「青少年の体育」の中に，ルソーの「エミール」からかなりの量の引用文をそのまま仏文で載せたり，ルソーの教育主張に対するグーツムーツの同意の旨を表明している叙述が他にも多く見られることからも理解されるところである[22]．このようにグーツムーツは「青少年の体育」の前半部分である第1部，つまりグーツムーツが体育の必要性を述べたり，「体育」の意義づけや理論化を行なっている部分に，「エミール」からの引用文を多用しながら自己の論を敷衍し補強しているのである．したがってわれわれは，グーツムーツが「青少年の体育」を叙述するにあたって，重要且つ肝腎な箇所で「エミール」から多くの教育理論を援用していることを理解できるのである．

またグーツムーツは「青少年の体育」の随所に，「自然」(die Natur) や「自然の法則」(das Naturgesetz) や「自然人」(der Naturmensch) という語を使用しながら，自然人や自然の教育に関して多く叙述し，彼の自然主義教育観や自然主義体育思想を展開しているのである[23]．このグーツムーツの〝自然主義教育思想〟こそ，ルソーが「エミール」の中で展開した〝自然主義教育思想〟から継承されたものではなかろうか．

ルソーは「エミール」にこの本の「体系的部分と呼んでいいものは，自然の歩み la marche de la nature にほかならない[24]」と端的に「エミール」の中核概念が自然の法則に則る自然の教育であることを宣言しているのである．これはルソーが「エミール」の中で自然 l'éducation de la nature，事物 l'éducation des choses，人間 l'éducation des hommes の三種の教育が存在することについて述べているが，自然，事物，人間による三種の教育の中でも，人間の教育だけがほんとうの意味でわれわれが手を下すことのできるものであり，次の事物の教育は限られた部分だけしかわれわれの自由にならない教育であると指摘している．だから教育というものは結局，最終的にわれわれの手の届かない，いかんともしがたい三番目の「自然の教育」に他の二つの教育を合致させなければならないとルソーは考え，自然の法則に従った自然主義教育が人間教育の思想的原理の根底にあることを述べているのである[25]．このようにルソーは「自然の法則」(la regle de la nature) を自己の教育思想の中核と位置づけ，所謂ルソーの自然主義教育思想を「エミール」に表明しているのである．

以上述べてきたように，ルソーとグーツムーツを関連づける基礎にあるものは両者の教育ないし体育思想における「自然」主義という問題ではなかろうか．このことは当時の「時代の虚弱化」を憂えてグーツムーツが述べた，「このような虚弱化の情況の進行のもとで，文明化された人類 des kultivierten Menschengeschlechts の身体的衰退やかつての極めて堅固な英雄的本性 der alten kernfesten heroischen Natur の退化について嘆き，ますます弱く，みじめになりつつある世代について心配するのである[26]」，「今やいかなる国民層も，彼らの身体的虚弱化を次第次第な自然力の減退 Nachlassen der Naturkraft のせいにするのでなく，不自然な教育や生活法 widernatürlicher Erziehung und Lebensart にのみその原因を求むるべきである．……自然 die Natur はわれわれの中に祖先と同じように，体力，持久力，勇気，毅然さの芽を与えているのである．……したがって訓練は自然の問題ではなくて Übung ist nicht ihre Sache われわれの問題である[27]」という表現に端的に窺うことができるのである．このように当時の人々の正しい文化の受容でなく，文化の誤用について述べているグーツムーツの自然観や文明観には，明らかにルソーのそれと軌を一にする，すなわち同一原理に立つ自然観をわれわれは見い出すことができるのである．つまりルソーが「エミール」の中で最終的に求めた理想的人間像は，「有徳な社会的自然人」であり，それは自然人の本来的良さや善性を維持しつつ，社会契約論的民主社会を担って，現実社会を生きていく有徳な社会人であったのである[28]．

このようにグーツムーツとルソーは，子ども自身の中に備わっている本来的人間性や人間的良さを教育上尊重し，この人間の本来性（自然）をなによりも十全に守り育てて，開花させることに重点を置く教育観に立っているのである．両者のこのような自然主義教育観（いはばルソーの消極教育 l'éducation negatif の原理）は，都会を離れた舎田に教育の場を求め，自然のあふれた緑の田園に設定されることになるのである．これを人間形成的に眺めれば，グーツムーツが主張するように人間の堕落や虚弱化を導く，洗練 Verfeinerung は正しい意味での教育ではなく，人間の本来性を尊重しながら，正しい人間形成である教化 Kultur が教育上特に望まれるということになる．このことは別言すれば，人間と市民の二元的相剋を求めたルソーの「エミール」の究極目標であった，「有徳な社会的自然人」の形成の主旨と合致することになるのである．

これを要するに，グーツムーツはルソーの「エミール」からその中核思想である自然主義教育思想を「青少年の体育」に継承し，彼の自然主義体育思想を形成することによって，グーツムーツの近代的体育論である「体育」(Gymnastik) の理論化を達成することができたということがいえるのである．

教育原理においてルソーの自然主義教育思想を学んだグーツムーツは，その「体育」教育の実践的な指導方法論においても，合自然の教育方法を学んだといえる．このことは「青少年の体育」に述べられた，多くの教育方法に関する叙述やシュネッペンタールの汎愛学校での体育指導の実践場面にあらわれているのである．

グーツムーツは「青少年の体育」の中にルソーの「エミール」から次のような言葉を引用している．「子ども時代を愛しなさい．子ども時代の遊び，楽しみ，その愛すべき本能を育くみなさい．いつも唇に笑いがあり，平和な時代を時々懐かしく思い返さない者があろうか[29]」と．これはルソーの特徴的な教育論である，教育上子どもの自然な本性を尊重するという，児童尊重の教育精神の表明をグーツムーツが受け継いだものとわれわれは考

えてよいであろう．このことはグーツムーツがシュネッペンタールの体育場で，楽しく，自由で，喜びにあふれた自然な方法で授業を展開しながら，「体育は若々しい喜びに包まれた課業である[30]」と述べているグーツムーツの体育観からも窺うことができるのである．

このようなグーツムーツの子どもの本性を尊重したり，自然の法則に合致する合自然の指導方法は，子どもの発達課題にも適合するものになるのである．つまり，子どもの年齢や発達段階に注目し，子どもひとりひとりの運動学習の到達段階や到達課題を把握した，個性的教育方法がとられるものでもあった．この点にルソーの合自然の教育方法原理を学び，そこから児童の立場に立った多くのユニークな指導方法を展開し，体育指導の実践を試みたグーツムーツの偉大さをわれわれは認めるべきであろう．

また，子どもの自発性を尊重する指導方法として，「身体形成の根本原則は強制しないということにある[31]」と考えるグーツムーツは，実際の体育指導にあたって当然子どもの自発性を尊重するものであった．そのためには特に動機づけが大切であるとグーツムーツは考えているのである．そこで子どもに成人の手本をよく観察させることによって運動をよく認識させること，体育教育や実際の学習場面で「体育」の価値をよく子どもに確認させるための指導を強調している．さらに指導過程での動機づけを大切にするグーツムーツは，動機づけのために子どもの名誉心を大切にし，それに訴える指導を大事にしているのである．そのために，子どもが目標を達成したり，学習過程における子どもの努力に対しても教師は十分注目し，その場合に称賛を与えることが大切であると述べている[32]．

このように汎愛学校の教育実践者としてのグーツムーツは「青少年の体育」の随所に合理的で自然に合致した多くの新しい指導方法を追究して，楽しい，喜びにあふれた授業を展開しているのである．特に「青少年の体育」の第20章体育指導の実際的な「方法，時間の使い方，一般規則」において，細かで具体的な実践場面に即した指導方法を述べているのである．

これを要するに，グーツムーツは「自然の法則」に合致した，子どもの本性を尊重する教育方法をルソーの「エミール」から学び，それをもとにしてシュネッペンタールの体育指導の実践的経験から多くの特色ある，新指導方法を開拓したといえるのである．このような体育指導における合自然の指導方法原理をグーツムーツは，ルソーの「エミール」から学んでいる点に，すなわちルソーとグーツムーツの教育指導における合自然性に両者の思想的関連性の存在を認めることができるのである．

さて次に，ルソーの「エミール」からグーツムーツは，「私たちのなかでこの人生の良いことと悪いことに最も良く耐えられる者こそ，最も良く教育された者である[33]」というルソーの言葉を引用しているのである．このように「時代の虚弱化」を憂えるグーツムーツは教育上鍛練主義の教育を表明することとなるのである．

天候や激しい仕事に対する身体の耐久性を不断の身体訓練によって作り出すことを願うグーツムーツは，「身体をもっと鍛えなさい．そうすれば身体はもっと耐久性と神経の強さを養うことになるだろう．身体を訓練しなさい．そうすれば身体は力強く活動的になるだろう．そうすれば身体は精神に活力を与え，精神を男らしく，力強く，根気のある，確固とした勇気に満ちたものにするだろう．精神は快活さによって養われ，自然と同じように活動的になり，退屈さによって毒されることはないだろう[34]」と述べている．このようにグーツムーツは精神の一面的形成や身体の一面的形成を否定し，ルソーの「エミール」から心身両面の相補関係の教育説を引用して[35]，鍛練主義的教育の考え方を強く訴えているのである．このことからも理解できるように，グーツムーツは鍛練主義の教育の主張においても「エミール」から多くを学んでいるのである．

この他にもグーツムーツは，ルソーの「エミール」から，手の創造的教育活動である，手工作業が子どもの教育にとって重要であるとの見解を学んでいるのである．そこでグーツムーツは「エミールは手仕事を学ぶべきである」とルソーが主張していることを「青少年の体育」に述べている[36]．この青少年の手工作業が教育上大切であると考えるグーツムーツが，後に「手工作業書」を著していることは，前に述べたとおりである．こうしてグーツムーツは「青少年の体育」の第21章に「手仕事」(Handarbeiten) を章立てして，青少年の腕の力や手の器用さや感覚を養うことの重要性をいろいろと展開しているのである．

さらにグーツムーツは「青少年の体育」の第18章「感覚訓練」(Übung der Sinne) のところに，ルソーが人間の理性や知的理解の道具となるわれわれの感覚器官の

訓練を推奨していることを例に引きながら[37]，教育上子どもの感覚的直観の訓練の重要性や教育的意義について，感覚訓練の多くの実験例を述べながら，ユニークな感覚教育論を主張，展開しているのである．

以上述べてきたように，グーツムーツが「青少年の体育」に展開した体育思想には，ルソーが「エミール」のなかですでに述べている教育・体育思想と同一原理にたった教育の考え方が多くみられるのである．この点に関してグーツムーツの体育思想に与えたルソーの先駆性に，ルソー体育思想の体育思想史的意義を認めることができるのである．すなわち，グーツムーツは「青少年の体育」を叙述するにあたって，ルソーの「エミール」から，心身の調和的な教育，自然主義教育思想，合自然の教育方法，鍛練主義教育，教育上手工作業や感覚訓練を尊重すること等の教育思想を学んでいるということをわれわれは理解することができたのである．

む す び

後進ドイツが18世紀後半，領邦絶対主義体制の下で資本主義化を進み始め，産業革命を迎えて多くの社会的矛盾を露呈し，その疲弊は国民の生活や教育等の面に重大な影響を及ぼしていたのである．そこでグーツムーツが目にしたものは，「世代の虚弱化」，「時代精神の虚弱化」であった．その原因をルソーのように社会の根底の問題にまでメスを入れなかったグーツムーツは，当時の生活法や教育の問題として，すなわち国民教育における対策のなさ，身体教育の欠如に問題の根源はあると考えたのである．そのことに対する解答が8年間のシュネッペンタールの汎愛学校での教育や体育指導の実践的経験や「体育」研究の結果として，1793年に出された著作「青少年の体育」であったのである．そこでグーツムーツは当時の医者や教育者等から学びながら，また生理学や解剖学，教育学等を援用して身体運動による教育の新しい学問，つまり「体育」（Gymnastik）理論を確立し，この体育を国民教育に導入し，実践させることを目指したのである．そしてこのような体育を通して，行動的な近代的市民を形成し，幸福に生きていける繁栄社会の建設を描いていたのである．

この「青少年の体育」を内容的に見るならば，多くの人々の著作や教育や体育に関する考え方を学びながら，グーツムーツの新しい教育観や体育理論を具体的に主張しているのである．その際フランクやロック等の論を援用しているが，なかでも特にルソーの「エミール」にみられる自然主義教育思想から受けた影響は莫大なものがあったことは述べてきたとおりである．

すなわち，

教育上心身の調和的教育の考え方を「エミール」から継承し，身体的側面の形成と精神的側面の形成を相補的に推進する教育をグーツムーツは考えていた．

グーツムーツはルソーの自然主義教育思想を学び，自己の自然主義教育思想ないし体育思想を形成し，教育上人間の本来性や自然を尊重する教育観を主張した．

グーツムーツは教育における合自然の教育方法原理をルソーの「エミール」から学び，被教育者である児童を尊重する多くのユニークな体育指導の方法原理を創造した．「時代の虚弱化」を憂えたグーツムーツの体育指導は当然，ルソーの〝自然の法則〟に従った鍛練主義的な考え方を有するものであった．

また，グーツムーツはルソーと同様に教育上子どもの手の労働，手工作業に人間教育的な意味を見出すものであった．さらにルソーと同様子ども段階での感覚訓練，感覚教育を重要視するものであった．

以上の点にルソーとグーツムーツの教育思想ないし体育思想の関連性を明らかにわれわれは確認することができたのである．

また以上の点をグーツムーツの「青少年の体育」に即していえば，

このような近代的「体育」理論を考えるグーツムーツは「青少年の体育」の第1部，つまり体育を明確に人間教育の基礎と位置づけたり，その理論化の部分にルソーの「エミール」に存在する教育思想や体育思想を学び，その影響が数多くみられるのである．そして具体的実践論を述べた後半の第2部，つまり各種の「本来の体育運動」を述べた部分には，明らかな影響は確認できなかった．最後の第3部の感覚訓練や手工作業については今述べたような明らかにルソーの影響がみられたのである．このように体育運動の各種目等については，グーツムーツは創意工夫を加えながらも，バゼドウ以来の，特にシュネッペンタールの汎愛学校での前任者アンドレの方式を学び，ほぼそれを踏襲しているのではなかろうか．

このようにグーツムーツはルソーの「エミール」から自然主義教育思想を中心とした多くの教育や体育の考え方を学び，継承して，実にあのような近代的体育論である「体育」（Gymnastik）の理論化を達成したというこ

とがいえるのである．この点にわれわれはルソー体育思想の汎愛教育家グーツムーツに対する先駆性やルソー体育思想の有する体育史的意義を本小論でも十分確認することができるのである．

註

1) 成田十次郎「近代ドイツスポーツ史Ⅰ学校・社会体育の成立過程」，不昧堂，1977

2) 成田十次郎「18世紀のヨーロッパにおける医学者の運動論について」，東京教育大学体育学部紀要，第5巻，1965年，p. 18に K. Wassmannsdorff, C. Euler, E. Neuendorff, E. Mehl, G. C. A. Berndt, A. B. Natsch, H. Bernett, H. Groll, S-korning らの諸論文は，すべてこのような見解に立っていると述べている．

3) 入澤宗寿「汎愛教育思想の研究」，教育研究会，1927年，pp. 382—383，金子茂「J. B. Basedow の教育・教授にみられる『服従』の役割——Rousseau との関連を手がかりとして」，九州大学教育学部紀要13，1968，今村嘉雄「第18世紀における独逸体育思想——特に汎愛派体育思想へまでの史的発展」「体育論文集」所収，目黒書店，1933，Hermann Weinen, Geschichte der Pädagogik, 1976，平野一郎監訳「ドイツ教育史」，黎明書房，1979，p. 110, Van Dalen, A World History of Physical Education, Prentice Hall, 1971 (second edition), pp. 185—196, Ellen W. Gerber, Innovators and Institutions in Physical Education, Philadelphia, 1971, pp. 83 —86, Bruno Saurbier, Geschichte der Leibesübungen, Limpert, 1976, s. 106

4) 成田十次郎「グーツムーツの生涯」，成田訳「青少年の体育」所収，明治図書，1979，p. 222

5) 長田新編「ペスタロッチー全集」第11巻「体育論」，平凡社，1974（第2版），pp. 315—316, Kleine Pädagogische Texte 7, Pestalozzis Einleitung auf den Versuch einer Elementargymnastik, verlag Julius Beltz, Weinheim, 1962, s. 8—9

6) 入澤宗寿，前掲書，pp. 343—345及び同書第4章汎愛教育思想の特色及び批判参照

7), 8) 成田，「市民体育論の確立……グーツムーツ」，岸野雄三他編「体育・スポーツ人物思想史」，不昧堂，1979年所収，p. 118

9) 成田，上掲「近代ドイツスポーツ史Ⅰ」，pp. 94—95

10) 成田，上掲「市民体育論の確立……グーツムーツ」，p. 141

11) GutsMuths, Gymnastik für die Jugend, 1793, Sportverlag Berlin 版，1957，S. XXⅢ

12) GutsMuths, ebenda, S. 3—40

13) GutsMuths, ebenda, S. 20

14) グーツムーツは「青少年の体育」の中で身体の教育（身体教育）に関連して Körperbildung, körperliche Übung, physische Erziehung, körperliche Erziehung, pädagogische Leibesübungen, Leibeserziehung, physikalische Erziehung 等の語を使用しているが，なんといっても中核は人間形成的営みである教育としての体育運動である体育 Gymnastik がその究極であったと同時に彼の生涯をかけて追究したものであった．

15) GutsMuths, edenda, S. 120

16) Rousseau, Émile ou de l'éducation, 1762, Classiques Garnier 版，1964，p. 120

17) GutsMuths, ebenda, S. 46

18) GutsMuths, ebenda, S. 154

19) GutsMuths, ebenda, S. 46, 61, 70, 103, 111, 151と6ケ所が精神と身体のいわゆる心身調和教育説である．

20) GutsMuths, ebenda, S. 161

21) Rousseau, Émile, op. cit, p. 37

22) グーツムーツの「青少年の体育」は同時代の医学者や教育学者等を中心とした多くの著作からの引用がなされているのであるが，一番多いのがヨハン・ペーターの「医学警察大系」(System einer vollständigen medizinischen Polizei, 1779—1819，全8巻）から14，次がルソーの「エミール」から13である．（GutsMuths, ebenda, S. 422—427の出典文献一覧より算出）

GutsMuths, ebenda, S. 12, 14, 46, 51—2, 61, 70, 71, 103, 104, 107—8, 111, 122, 151，この他ルソーや「エミール」に関連して言及しているところが9ケ所（GutsMuths, ebenda, S. 74, 75, 119—2ケ所，326—2ケ所，380，392，395）あり，ルソーの教育意見に対して同意や賛成の意を述べている．批判しているのは380の，子どもの走運動に対するお

菓子による動機づけのところのみである.

23) 「青少年の体育」の第1部, つまり「体育」の理論づけの部分を見ただけでも,「自然」(die Natur) については随所に,「自然人」については, GutsMuths, ebenda, S. 3, 17, 40, 49, 115, 116, 117, 119, 120に,「自然の法則」については, S. 23, 40, 45, 51, 62, 66と多くを数えあげることができる.

24) Rousseau, op. cit., p. 2

25) Rousseau, Ibid., p. 7

26) GutsMuths, ebenda, S. 20　傍点筆者

27) GutsMuths, ebenda, S. 40—41　傍点筆者

28) 拙論「ルソー教育思想の先駆者を求めて」——モンテーニュとの関係を中心として——, 東京家政大学研究紀要第19集(1), 1979年3月参照

29) Rousseau, op. cit. p. 62

30) GutsMuths, ebenda, S. 160

31) GutsMuths, ebenda, S. 382

32) GutsMuths, ebenda, S. 380—391

33) Rousseau, op. cit. p. 12

34) GutsMuths, ebenda, S. 86

35) Rousseau, op. cit. p. 118

36) GutsMuths, ebenda, S. 395

37) GutsMuths, ebenda, S. 326